

東アジアのなかの京焼 — 中国・朝鮮陶磁とのつながり

Kyoyaki within East Asia - connection with Chinese and Korean ceramics

京焼は華やかな色絵に彩られた雅やかなやきものという高級飲食器のイメージが形成される一方で、奥田穎川や青木木米など煎茶の流行を背景に活躍した名工による、中国陶磁写しの伝統が継承されてきた。つまり、京焼は決して現在言われているような「和のうつわ」という性格だけが突出しているわけではなく、和漢の要素がバランスよく調和して作られてきた歴史を持っている。

明治期以降、製陶技術の改良が進むにしたがって、中国陶磁の強い影響を受けた本格的な製陶家が現れ

るようになった。彼らの特徴は、中国陶磁の正統である歴代の官窯製品の影響が強く見られる点である。ここで取り上げる三代清風與平、初代諏訪蘇山らは、明治～大正期においてその最良の成果を残した製陶家である。また、昭和前期には製作面から民芸運動を担った河井寛次郎が、呉須と辰砂による絵付けを基本としながら、朝鮮陶磁の力強い造形を取り入れた独自の作風を展開したことも特筆すべき点である。このように、近代の京焼のなかに東アジア陶磁の縮図を垣間見ることができるのである。

1 — 大日本永楽造
《紅地金襴手吉祥文手鉢》
明治期



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

京焼多彩なり——明治から昭和へ

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 44

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十九年七月七日発行

© 2007, The Museum of the Imperial Collections